

2021年1月3日 礼拝説教要旨

詩編講解説教42「さあ、頭を上げて」

詩編42：2～7、ヨハネ19：28～30

第42編は「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」（6、12節）と繰り返します。「魂がうなだれる」という表現はとても詩的な表現ですが、魂が力なく首を垂れている、くずおれるという状態です。「魂」と訳されている言葉はネフェシュという言葉です。天地創造の物語で、神さまが人間をお造りになられた時に「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創世記2：7）とあります。この「生きる者」と訳された言葉がネフェシュ、魂と訳している言葉です。これは人間の一番深い部分、その人そのものとなる部分と申し上げてよいでしょう。それは神さまが命の息を吹き入れることで始まる命です。そこがうなだれている。これは人間にとって最も深刻な状況だと言えるでしょう。

その原因は何でしょうか。「神に、命の神に、わたしの魂は渇く。いつ御前に出て、神の御顔を仰ぐことができるのか」（3節）この詩人は久しく御前に出ていない。それは神さまを礼拝できない状況にあると理解することができます。カルヴァンは、この歌をダビデのものとして次のように言います。「彼がサウルによって亡命を余儀なくされ、哀れな放浪者のように、あちこちさまよって歩いたとき、もっとも心を痛めたのは、彼が聖所に詣でる機会を奪い去られたことである」つまりダビデはサウルから逃亡して神さまを礼拝することができない状況に置かれたわけですが、そこに魂の渇きが起こったとカルヴァンは言います。また3節「命の神」とありますが、これは「生ける神」ということです。これは生きていない偶像の神に対して「生ける神」という言葉が使われていると理解することができますので、イスラエルが捕囚によって異教の国々に連れられていき、そこで偶像の神々を拝む環境に置かれる。そこに魂の渇きが起こった。そういう屈辱的な経験がこの詩の背景にあると考えることもできます。それゆえ詩人はかつて神さまを礼拝していた時のことを懐かしみ、思い出しているのです。「わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす。喜び歌い感謝をささげる声の中を、祭りに集う人の群れと共に進み、神の家に入り、ひれ伏したことを」（5節）

神さまを礼拝することができないことに魂の渇きが起こっていることをわたしたちはもっと真剣に考えるべきです。特にこのことは今切実な問題でしょう。コロナ禍においてまさしく礼拝が制限されてしまう。それこそ「いつ御前に出て、神の御顔を仰ぐことができるのか」と礼拝を切望する思いに駆られている人々も多いと思います。先週は感染が拡大していることを受けて臨時の長老会を開きました。1月からの礼拝について話し合いました。4月の緊急事態宣言の時は礼拝を長老のみに限定するという処置をとりましたが、このことは何としても避けたいという思いでした。結果としてより慎重な対策を講じることで朝の主日礼拝を維持するという結論に至りました。それだけわたしたちが命をかけているものがここにあるのです。これはあく教会の話ですが、礼拝を短縮することで礼拝のプログラムを大幅に変更しなければならなくなった。そのことで教会の役員をしている中心的人がその教会を去ってしまったというとても残念な話です。「それだけで？」と思われるかもしれませんが、もちろん詳しい事情は分かりませんが、その方はそれでは魂が満たされなくなってしまったのです。それだけ魂の問題は重大なことなのです。

もう一つ、このコロナ禍が深刻なのは訪問ができないことです。特に病院、施設に訪問できない。今日も午後に訪問しますがそれはその方が入院する前にお会いして祈るためです。病院に入ったら会えないからです。感染対策を万全にしなければならないのはよくわかるのですが、一方で魂の問題もあるということを日本の医療機関、高齢者の施設は考えてほしいのです。海外の病院ならチャプレンと言って牧師つきの病院は多いのですが、日本の病院はまだまだ少ないですし、理解がありません。魂の健やかさは実は体の健やかさと同じくらい、いやそれ以上に大切なのです。

どうして魂のケアがおろそかになるのか。魂の渇きはなかなか気づきませんし、自覚しにくいのです。体の渇きは分かりやすいのですが、魂はそうはいかない。特に人間は物質的に満たされてしまうと魂も満たされたように感じてしまう。そのうちにそれが常態化する。それが自然になってしまふ。それは神さまの形に造られた人間としては致命的なことです。有名なアウグスティヌスの『告白』の冒頭にある言葉を思い出します。「あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである」人間は神さまの命の息によって生きるものですから、その命の息を感じられないところでは魂は安らえないのです。そう考えると罪ゆえに神さまから離れている人間の魂はすでに渇ききっているのかもしれない。魂の渇きに気づかないまま過ごしているのです。

しかしだからこそイエス・キリストがこの渇ききった魂のところへ来てくださいました。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネ4：14) そのためにご自身の命を注いでわたしたちの魂の渇きを潤してくださいました。主ご自身が十字架におかかりになられ、魂の渇きを誰よりも深く味わわれたのです。同じヨハネ福音書は主イエスが十字架上で「渇く」と言われたことを伝えます。わたしたちの魂の渇きを潤すためにご自身がその命を注ぎ尽くされ渇かれたのです。

そう考えますと洗礼を受けてキリストに結ばれている者は、根本的にはその渇きを癒されていると理解することができるでしょう。いや、それゆえに魂の渇きに関して誰よりも敏感なのです。一度でも魂を安らう経験をした者は、少しでも魂が安んじないことに耐ええないのです。しかしこのキリストによって、もはやわたしたちの魂は渇くことはありません。だからこそ「なぜうなだれるのか」と詩人は言います。それはすでにキリストの救いを見据えているからです。キリストゆえにもううなだれることはなくなった。頭を上げて主を礼拝しよう。この年もわたしたちはそのように導かれています。